初夏書展

令和三年度
京都大学　書道部
第百二十七回書展
「初夏書展」

【日程】
六月二十七日
オンライン開催

Twitter：@kucc_E201
Instagram：ku_shodobu2020
HP：http://kushodo.club

巻頭に寄せて

みなさんは、何かに「こだわり」を持っていますか？
あるいは、お知り合いの中にこだわりの強い人は居ますか？

私の場合「こだわりの強い人」で思い浮かぶのは、昨年亡くなった祖母です。彼女の使うものは、どれも好きなもので揃えられていました。私事で恐縮ですが、ここから少し祖母の話をします。

祖母は小学校の教師をしながら、詩人としても活動していました。退職後も詩の創作は続き、私が幼い間に創作活動を終えたものの、芸術家としての印象を与えました。

こだわりの強い彼女は自作の詩をよく筆で書いており、筆や墨、印も自分で選んでいました。時には地元奈良の書家・故松本碩之さんとも交流があったようです。今思えば、そうやって一つひとつの作品に情熱を注ぎ、彼女なりに創作活動に打ち込んでいたのでしょう。

私は書道部に入って改めて「書」について考えました。時季に合った言葉を選ぶ、自分の気持ちを表現する、また理想とする字を目指すといったように、書道作品は本当に様々です。そして言葉を作品として遺す、その理想を追求していくのは、とても奥深い営みだと感じました。こだわればとことんこだわる事ができるのです。祖母が自分の言葉を理想的な書として遺そうとしたように、私も書道部員の一人として自分なりのプロ意識を持って作品と向き合いたいです。

こだわりの強さといったら、京大書道部も並々ならぬものがあります。道具選びから線質の追求まで、部員たちが表現する「こだわり」に私はいつも驚かされます。筆で字を書くだけでなく、石や木に字を刻んだり絵を描いたりして魅せてくれる部員も居ます。

思うに「こだわり」は「好き」に通ずるのではないでしょうか。書展には部員たちの「好き」が詰まっており、その感動が見ている人々にも伝われば幸いです。

しかしながら好きなことを続けるのは、楽しいばかりではありません。自分が納得できるまで長い時間をかけて試行錯誤と練習を積み重ねています。何枚も失敗し、思うように書けず悔しい気持ちになることもありましたが、各々が自分にしか書けない作品を目指しました。

最後になりますが、昨年度はイレギュラーな事態の多い一年でした。それらを乗り越えこの度も無事に書展を開催できるのは、顧問の成田先生と行友三輪子様、技術顧問の寺本先生をはじめとする多くの方々のおかげです。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

皆さま本日は第百二十七回初夏書展を見に来てくださり、誠にありがとうございます。部員それぞれがこだわって仕上げた作品となります。ご自身の「好き」と一致するものを探しながらご覧になってください。

令和三年六月吉日

京都大学書道部　部長　乾未樹

千里の面目

成田健太郎（京都大学大学院文学研究科准教授）

六世紀中国の顔之推は、その著書『顔氏家訓』の雑芸篇に、「尺牘の書疏は千里の面目なり」という当時の江南地方の諺を引用しています。手紙の筆跡を見れば、千里離れた相手でも、まるで顔を合わせているかのようにコミュニケーションできる、というような文意でしょう。今、二〇二〇年の世界の激動を振り返るにつけて、この言葉に特別な思いを催される人も少なくないのではないでしょうか。

私たちはふだん他者とコミュニケーションするとき、言葉だけではなく、実はそれ以外のさまざまな要素にも頼っています。そして、表情であったり身ぶり手ぶりであったり、そういった非言語要素が使えないコミュニケーションにおいては、私たちはなんとかそれを補おうとします。メールに顔文字を使ったり、ＬＩＮＥにスタンプを使ったりするのもそのような工夫といえるでしょう。

顔之推の時代には、対面でのコミュニケーションがかなわないとき、頼れるのは手紙だけでした。当時の手紙には、遠く離れた知人と、対面にできるだけ近い水準で心を通わせたいと痛切に願った人々の工夫が傾けられていたにちがいありません。そして、顔之推自身の手紙こそ残念ながら後世に伝わっていませんが、彼が学習した王羲之ら江南貴族の尺牘は、模写を繰り返して伝承され、今なお古典として学習されています。

文字を書くときに、どのような書体を選んでどのように配置し、一点一画にどのようなニュアンスを纏わせるか。他者と対面する機会を制限され、コミュニケーションの変容を経験した今こそ、そのような細かい工夫を重ねる書道の営みが、もっと輝いて見える時なのかもしれません。

作品を創る

寺本蒼玄（京都大学書道部技術顧問）

新入部員の皆さん、入部おめでとうございます。

さて皆さんの内、何名かは展覧会に出品したことは無いと思います。高校において「書道」を選択し、学んだ人は何名いるでしょう。

まずは、古典といわれている作品を臨書してみましょう。書の古典には、篆、隷、楷、行、草などの書体があり、それぞれの特徴があるので、好きな古典をまずは書いてみよう。解らない場合、先輩や指導教官に聞いてみると良いと思います。

筆はどの様な物が、その古典にふさわしいか、又、墨色は濃い方が良いのか、紙はにじむ方が良いとか、そして仕上げる紙の大きさや形式など、いろいろ揃えていく内に、作品が整ってきます。

まず、ポピュラーな紙のサイズは、半紙といわれる物です。その大きさに、一字から六字くらいの字数を書いてみましょう。

形を似せる勉強ですから、折って字の大きさを確かめて、行、草の作品ならば、文字の大、小や、潤、渇の変化を創り出して下さい。半紙の作品を創ることは、作品創作の基本です。一枚の紙面をどのように生かすのか、ここから始めて下さい。余白の妙などを考えながらまとめる事も大切な要素です。

先輩たちの大きな作品は、この様にして、仕上げて来たのです。皆さんもまずは自分の部屋に飾る作品を創り出して下さい。

作品制作の方法——臨書と創作

書作品を作る方法には、臨書と創作の二つがあります。

臨書

歴史上の優れた書の古典を手本として、それをまねて書くことを臨書といいます。書道の学習で最も基本となる方法で、伝統的には次の三つの段階を踏むのがよいとされます。

(1)**形臨**　文字の形や筆づかいを似せて書くことです。古典をよく観察し、できるだけ古典に近づけて書くことが学習の出発点となります。

(2)**意臨**　形にこだわらず、古典の雰囲気や精神を汲み取って書くことです。意臨が重視されるのは、形だけを追っていると時に筆運びのリズムが失われ、浅い印象の書になってしまうことがあるからです。また、古典の中には模本（敷き写し）や拓本（石に刻し、それを墨で写し取ったもの）だけが残り、元の姿が伝わっていないものもあります。そのようなものを臨書する際には、想像力を働かせて書くことが必要です。

(3)**背臨**　古典を見ずに、記憶を頼りに再現して書くことです。古典をいかに観察し、理解しているかが問われます。

形臨、意臨、背臨と進むにつれて、臨書には書き手の個性が強く現れるようになります。臨書は単なる模倣ではなく、ひとつの表現方法なのです。臨書作品は、そのような学習の成果を作品として形にし、発表するものです。

＊

臨書の対象となる古典を法帖ということもあります。はじめから芸術作品として制作されたものもあれば、石碑や手紙、文章の下書きなど、実用的な目的で書かれたものもあります。

京大書道部の書展では、臨書作品のそばに臨書した部分の法帖を掲示しています。ぜひ作品と見比べてご覧ください。

創作

臨書に対して、自分が表現したい言葉を書くことを創作といいます。自分で考えた言葉を書くこともあれば、漢詩や漢文、和歌や俳句、詩や短歌、歌詞などに題材を求めることもあります。

作品の構成や書体・書風は、選んだ言葉を最もよく表現できるように考えて工夫します。臨書の学習を生かし、古典の表現方法を取り入れると、作品に深みと味わいを出すことができます。

やみくもに言葉を書くのではなく、自らの感動や思いを言葉に託し、それに合った表現の方法を探して書くのが創作作品です。

作品の構成——印と落款

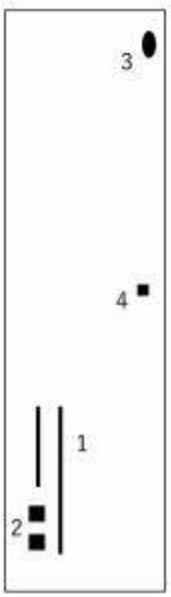
書作品の紙面は本文のほか、いくつかの要素からなっています。

落款

作品の末尾に書く署名とそれに続けて押す印のことです。名前のほか、語句の出典や臨書した古典の名、制作した時間や場所を書くこともあります。

印の種類

落款印以外にも、作品の右上（冒頭部分）に押す引首印や、自由な位置に押す遊印が加えられることがあります。また印は刻り方によって、文字の線を刻った白文印と、文字の線以外の部分を刻った朱文印に分けられます。



1 落款
2 落款印
3 引首印
4 遊印

書体について

書作品のジャンルは、使う文字によって漢字・仮名・漢字仮名交じりなどに分けることができます。漢字の書体には篆書・隷書・楷書・行書・草書の五つがあり、篆書から隷書が、隷書から草書・行書・楷書が生まれたとされています。同じ書体でも、書風（文字のもつ雰囲気）は作品によってさまざまです。



楷書

一点一画を続けずに離して書く書体で、起筆・送筆・収筆の筆づかいがはっきりしているのが特徴です。南北朝時代から発展し、唐代に完成しました。整った美しさをもつ書体です。



行書

曲線的で柔らかい運筆により、点画を続けて書く書体です。楷書に近いものから草書に近いものまでくずし方の程度はさまざまで、行書と草書を交えて書く行草書による作品もあります。



草書

行書よりもさらに大胆な簡略化が行われている書体で、楷書や行書とは字形が大きく違っている場合もありますが、くずし方には一定の規則があります。筆運びのリズム感が魅力です。



隷書

楷書が成立する以前、漢代に公式な書体として用いられました。扁平な字形と水平な横画、画の終わりに現れる「波磔」の筆づかいなどが特徴で、古風な魅力があります。お札に使われている書体です。



仮名の書

書道では主に平安時代のひらがなの書を指します。連綿（続け書き）や散らし書きによる繊細で流麗な表現は漢字の書にない特色です。今のひらがなとは異なる文字（変体仮名）も使われます。



漢字仮名交じりの書

戦後になって普及したジャンルで、「近代詩文書」「調和体」と呼ばれることもあります。詩・短歌・俳句といった文学作品や歌の歌詞など、身近な題材で表現できるのが魅力です。



墨象

墨象（ぼくしょう）とは、前衛書道やそこから発展した書道の概念・領域を超えた芸術分野のことで、墨を用いた造形の美を追究する分野です。

※墨象のイメージ画像は上田桑鳩『魚』を小竹美術HPより引用、その他の画像は本書展の出品作品を使用。

書家紹介

文責：関美乃

今回の書展で作品が臨書されている書家を中心に紹介します。

▶中国の書家

◎**王羲之**(303?～361?／東晋)

楷行草の各書体をほとんど完璧かつ芸術的な形に完成させた人物で、「書聖」と呼ばれています。王羲之本人が書いたとされる真蹟は残っていませんが、**『蘭亭序』**や**『十七帖』**などの多くの書の写しが伝わっています。

◎**欧陽詢**(557～641／唐)

褚遂良、虞世南と合わせて初唐三大家と呼ばれるうちの一人です。特に楷書に秀でており、「欧法」と言われる厳しく引き締まった書風の作品(**『皇甫誕碑』**など)から比較的穏やかな書風の作品(**『九成宮醴泉銘』**など)まで様々な代表作が存在します。

◎**顔真卿**(709～785／唐)

「顔法」と言われるたっぷりとした送筆が特徴的な表現を生み出した人物であり、欧陽詢らの初唐以来の書法を大きく変化させたとして評価されています。楷書(**『多宝塔碑』**など)・行草書(**『争坐位稿』**など)のいずれにも長けていました。

◎**楊峴**(1819～1896／清)

清代随一の隷書の名手と称される人物で、穂先の微動による生き生きとした線や独特の波磔が特徴的な書風で知られています。**『隷書五言聯』**などの作品があります。

▶日本の書家

◎**嵯峨天皇**(786～842／平安時代初期)

空海、橘逸勢と合わせて三筆と呼ばれるうちの一人です。欧陽詢の書を愛好しており自らの書風にも大きな影響を受けました。代表作である**『光定戒牒』**は真筆とされています。

◎**藤原定家**(1162～1241／平安時代末期～鎌倉時代初期)

和歌を得意とする家系に生まれ、自らも優れた歌人として活躍した人物です。同時代の他の貴族の優美な書とは異なる力強い書風で「定家様」と呼ばれ江戸時代に人気を博しました。**『更科日記』**は彼の晩年の作品とされています。

【参考文献】

『書家 101』石川九楊・加藤堆繁、新書館、2004 年　『中国書道史の 10 人』芸術新聞社、1996 年

作品一覧

技術顧問

寺本蒼玄
創作・『蓮花池畔暑風涼』……9
創作・『新塩動清節』……9

二回生

石田あかり
臨書・欧陽詢『九成宮醴泉銘』……10
岡雅博
創作・『新古今和歌集夏の歌』……17
高石京花
臨書・王羲之『蘭亭序』……11
戸髙海
創作・『黄庭堅詩』……14
乗杉玲壽
創作・『讀山海經』……12
凌楡凱
臨書・王羲之『蘭亭序』……12
創作・『作劉夢得陋室銘帯自序』……14

三回生

乾未樹
臨書・嵯峨天皇『光定戒牒』……13
大橋明日香
臨書・欧陽詢『皇甫誕碑』……10
栗原瑞樹
臨書・金農『金冬心隷書冊』……15
近藤毅
臨書・作者不詳『爨龍顔碑』……10
関美乃
臨書・王羲之『喪乱帖』……14
豊留まり
臨書・顔真卿『争坐位文稿』……11
益満朋佳
臨書・作者不詳『乙瑛碑』……15
松岡柚花
臨書・藤原定家『更級日記』……17

四回生

秋友祥香
創作・『梅』……15
坂崎亜実
臨書・作者不詳『礼器碑』……16
柴田達哉
創作・『孟浩然「春暁」』……16
豊永嵩晴
臨書・欧陽詢『九成宮醴泉銘』……11

修士一回生

市川拓真
臨書・楊峴『隷書五言聯』……16
鵜川大輝
創作・『「夏花」より』……18
牛田聡実
臨書・鍾繇『薦季直表』……10
吉田凌祐
創作・『百人一首　敦忠の歌』……17

合作

仲村康太郎／原誠人
創作・『半紙の小宇宙』……18
全体合作
創作・『よろこび』……18

作品紹介

賛助作品

技術顧問　寺本蒼玄　先生



『蓮花池畔暑風涼』（顧瑛）

蓮花池畔暑風涼し。

何子貞の雰囲気で沈着、爽快に書き上げました。



『新篁動清節』（元代・呉鎮）

新篁清節を動かす。

伝山の軽快な動きを表現してみました。

1

石田あかり　二回生

臨書　楷書　欧陽詢『九成宮醴泉銘』　半紙

「魏徵奉勅撰」

昨年度はほとんど書くことができなかったので、また一から頑張ろうという気持ちを込めて、高校生の時に書いた「九成宮醴泉銘」に再挑戦しました。まだまだ課題は多いです。



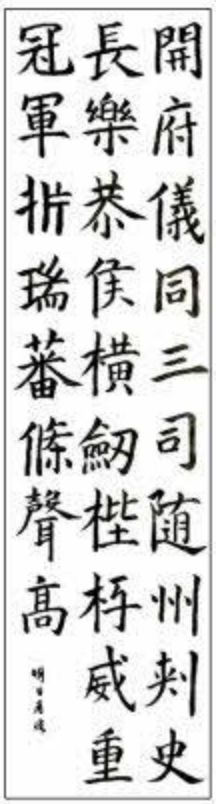
2

大橋明日香　三回生

臨書　楷書　欧陽詢『皇甫誕碑』　半切

「開府儀同三司隨州刺史長樂恭侯。横截桎梏。威重冠軍。析瑞蕃條。聲高」

欧陽詢らしさMAXの法帖です。これくらいキリッと格好よく生きたいものですが、そうはなれていないことが作品からも窺えてしまいます。



3

近藤毅　三回生

臨書　楷書　『鸞龍顔碑』　半切

「君諱龍顔。字仕德。建寧同樂（縣人。其先世則少昊顓）瑣之玄胄。才子祝融」

決して端正ないわゆる「美しい字」ではありませんが、素朴な魅力がありますよね。邪念を捨てて書きましたが、素朴さが出せているでしょうか……



4

牛田聡実　修士一回生

臨書　楷書　鍾繇『薦季直表』　半切

「臣繇言臣自遭遇先帝忝列腹心爰自建安」

新居で初めて筆を持ちました。楽しかったです。

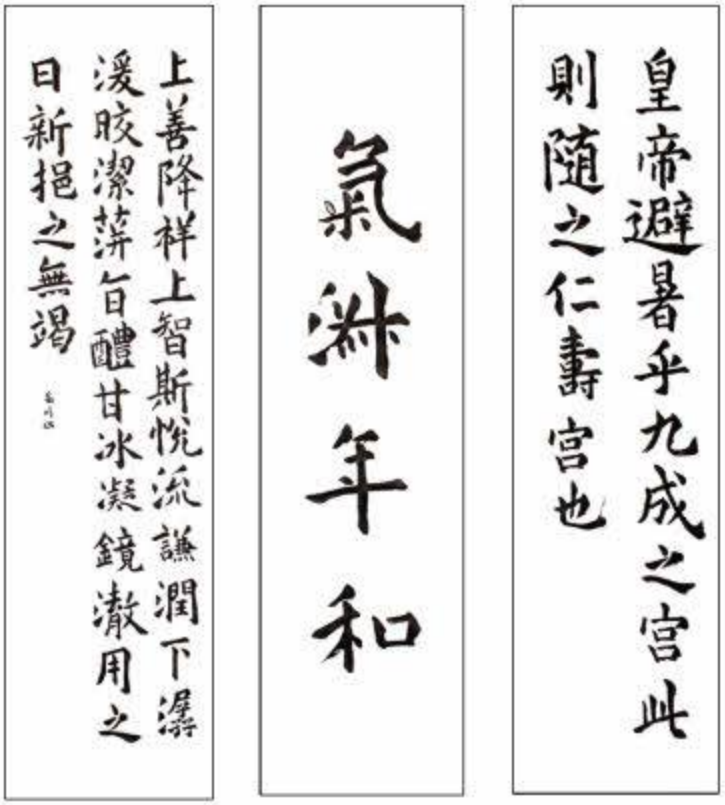


5

豊永嵩晴　四回生

臨書　楷書　欧陽詢『九成宮醴泉銘』　半切三連

「皇帝避暑九成宮之宮。此則随之仁壽宮也。／気淑年和。／上善降祥。上智斯悦。流謙潤下。潺湲皎潔。湝旨醴甘。冰凝鏡澈。用之日新。挹水無竭。」楷書の極則。端正で美しい字を目指して臨書しました。それにしても九成宮、気候は穏やかで綺麗な水がいくらでもあるなんて、素晴らしい場所ですね。



6

高石京花　二回生

臨書　行書　王羲之『蘭亭序』　半切

「仰観（観）宇宙之大 俯察品類之盛 所以遊目騁懐」初めて蘭亭序を見たとき一番印象に残り、またスケールの大きい情景も浮かんでくるので、この箇所を選びました。開皇本の肉感のある雰囲気を意識しました。



7

豊留まり　三回生

臨書　行書　顔真卿『争坐位文稿』　70cm×149cm

「右僕射定襄郡王郭公閣下蓋太上有立徳其次有立功是之謂不朽抑又聞之端揆者百寮之師長諸侯王」

「初夏」という響き、爽やかで良いなあと改めて思いました。今年は楽しい一年にしたいと思います！



8

凌檢凱（素鴻）　二回生

臨書　行書　王羲之『蘭亭序』一部　全紙（横長）

「右軍先生遊會稽山陰、賞山水而享醇酒、迷彭殤而悟生死、正如大和之經典伊呂波歌所誦也。今為紙幅所限、而不得已裁中而取首尾、捨憂而留樂、雖損文品、唯文旨及先生所感所悟、大至得見。亦以此勉世人于亂世。」

素鴻の一番好きな古典漢文や。自作漢文の序文をつけて、そこで自分の創作時の気持ちや創作目的などを表しておる。本文のみならず、本文以外のところもこだわっていて、古典中華的な書道作品を自分の考案で創っておる。こうした古典の世の雰囲気を伝えたらええなと思う。古典文学好きな方は時間があればぜひ『陋室銘』の原文や訳文を検索してみてね！



9

乘杉玲壽　二回生

創作　行草書　『讀山海經』　半切四幅

「孟夏草木長　繞屋樹扶疏　衆鳥欣有託　吾亦愛吾廬　既耕亦已種　時還讀我書　窮巷隔深轍　頗迴故人車　歡言酌春酒　摘我園中蔬　微雨從東來　好風與之俱　汎覽周王傳　流觀山海圖　俯仰終宇宙　不樂復何如」

初めての創作作品です。今まで臨書作品しか出したことがなかったので、文字の崩し方や線の質、文字の配置など1から自分で考えるのが大変でしたが、楽しく取り組めました。大好きな傅山の気風をあらわすことに力を注ぎました。



10

乾未樹　三回生

臨書　行草書　嵯峨天皇『光定戒牒』　二尺×八尺

「能三観仏乗、結三身於究竟、三種浄戒、開三因於初発。但光定宿因多幸、得遇勝縁、妄尋真、精祈戒品。庶使無上仏種、藉此敷栄」

嵯峨天皇の代表作を臨書しました。私はこのようなまるっとした字をあまり書かないので難しかったのですが、新鮮で楽しかったです。堂々として格好良い、そんな字を目指しました。



11

戸高海　二回生

創作　草書　『黄庭堅詩』　全紙

「青松出洞壑，十里聞風聲。上有百尺絲，下有千歳苓。自性得久要，爲人制顔飴。小草有遠志，相依在平生。醫和不並世，深根且固蒂。人言可醫國，可用太早計。小大材則殊，氣味固相似。」

今回はしっかりと作品にまとめようと、いろいろな字形を試しながら試行錯誤しました。長く鑑賞できる作品になっているといいです。



12

関美乃　三回生

臨書　草書　王羲之『喪乱帖』　半切

「羲之頓首。喪亂之極。先墓再離荼毒。」

大きさや線の太さが違う文字が混ざり合っているので、それをどうまとめるかに悩みました。まとまって見えることを祈ります。



13

凌楡凱（素鴻）　二回生

創作　草書　『作劉夢得陋室銘帯自序』　全紙横

「吾所欲言者，盡付於序也，願有同道之友，解吾感而附吾意，則吾甚喜而不絶孤也。此文乃素鴻之最好之文也，自閲之於時十有六七，乃深感夢得先生心境之崇，文筆之華，其朗朗上口，意味深長，古来亦有諸多文人墨士之筆墨。吾號亦取諸是文爾！願與君共享。」

素鴻の一番好きな古典漢文や。自作漢文の序文をつけて、そこで自分の創作時の気持ちや創作目的などを表しておる。本文のみならず、本文以外のところもこだわっていて、古典中華的な書道作品を自分の考案で創っておる。こうした古典の世の雰囲気を伝えたらええなと思う。古典文学好きな方は時間があればぜひ『陋室銘』の原文や訳文を検索してみてね！



14

秋友祥香　四回生

創作　草書　『梅』　約20×20cm

「梅」

書道をしている祖父の書風を参考にして書きました。



15

栗原瑞樹　三回生

臨書　隷書　金農『金冬心隷書冊』　半切

「如白人雖饕…」

冬樟展のリベンジです。

久しぶりに筆を持つとこんなに書けないものかと驚きますね。早くいつも通りの書道部に戻ることを願ってます。



16

益満朋佳　三回生

臨書　隷書　『乙瑛碑』　半切

不明

なし



17

坂崎亜実　四回生

臨書　隷書　作者不詳『礼器碑』　半切

「惟永壽二年。青龍在辛君歎。霜月之靈。皇……（略）」

一回生の頃に書いた作品にもう一度挑戦しました。当時の記憶がほとんど無くなっていたので新鮮な気持ちで書けました。



18

柴田達哉　四回生

創作　隷書　孟浩然『春暁』　35cm×35cm

「春眠不覺暁處處聞啼鳥夜來風雨聲花落知多少」

最近の私は暁を覚えてから就寝しています。これを「就寝暁を覚える」と言います（は？）。



19

市川拓真　修士一回生

臨書　隷書　楊峴『隷書五言聯』　半切二連

「於心有不猒。即事多所欣。」

学部生の頃から好きだった楊峴を久し振りに臨書してみました。



20

岡雅博　二回生

創作　かな　『新古今和歌集夏の歌』　半紙

「さつき山　うの花月夜　ほ（本）とと（ゝ）ぎす（数）　き（支）け（介）ど（登）も（毛）あか（可）ず（須）　ま（万）た（多）な（奈）か（可）むか（可）も（母）」

半切くらいに書きたいと思っていたのに、新年度思ったより時間がなくて半紙サイズになってしまいました…



21

吉田凌祐　修士一回生

創作　かな　『百人一首　敦忠の歌』　半切

「逢ひ見ての　のちの心に　くらぶれば　昔はものを　思はざりけり」

これは恋の歌です。百人一首なので解説は略します（小倉山荘のホームページなどを見てください）。

恋人だけでなく、家族や友人など多くの人を恋しくなる日々ですね。画面越しだけでなく、手が届く範囲で会えるのはいつになることでしょうか。



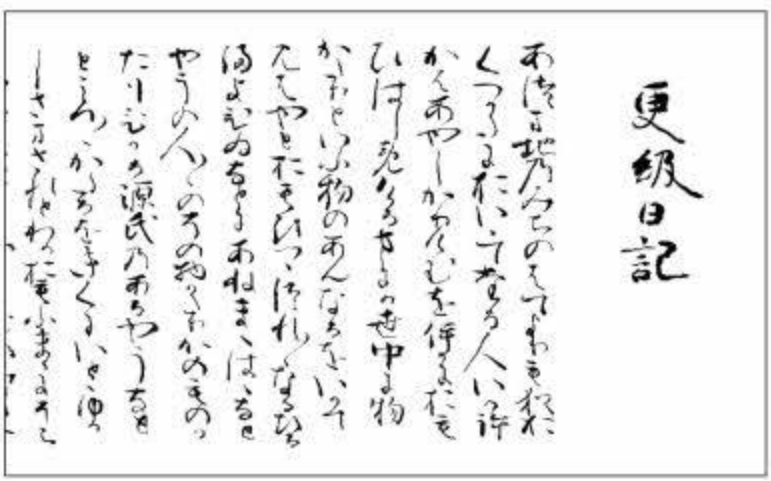
22

松岡柚花　三回生

臨書　かな　藤原定家『更級日記』　巻子

「更級日記　あつまちのみちのはてよりも…（略）」

昨年の初夏書展に出品しようと思っていた作品です。定家の独特な味わいある筆跡を感じとっていただければ幸いです。



（部分掲載）

23

鵜川大輝　修士一回生

創作　漢字かな混じり　『「夏花」より』　半切四分の三

「空と牧場のあひだから　ひとつの雲が湧きおこり　小川の水面にかげをおとす　水の底にはひとつの魚が　身をくねらせて日に光る」

学部生のころは見栄え、書きやすさから二八ばかり書いてました。ふと気がつけば、飾れるサイズの作品がほとんどない…

ということで今さらながら、部屋に飾れるサイズで書いていこうかと思っています。



24

修士二回生以上　仲村康太郎・修士二回生以上　原誠人

創作・臨書　楷書、調和体、墨象（以上創作）、任意の臨書一つ

『半紙の小宇宙』　半紙四枚×二人分

未定

まだ終わっていなかった、ＮＦ書展以来第二次代理戦争勃発。書道の教員志望者と、現職の高校書道部顧問による、半紙作品の可能性を追究する企画の第二弾。今回は、創造性を追究しました。



25

全体合作

創作　『よろこび』

喜び、悦び、歓び、慶び…　様々な「よろこび」を集めました。世の中を「よろこび」で明るく照らしたい！そんな思いが届けば幸いです。

【顧問・部員紹介】

顧問：京都大学大学院文学研究科准教授　成田健太郎

京都大学附属図書館　図書館企画掛主任　行友三輪子

技術顧問：日展会友　書家　寺本蒼玄

一回生

薬	淺雛穂乃花
経済	浅山桃佳
医	稲田梨乃
農	大林明日香
教育	岡野桂奈
経済	梶田晟充
医	木下美優
医	小谷大翼
文	坂田侑美奈
工繊	佐藤李郁
文	城本昌明
文	須田光太郎
農	鶴岡直穂
工	仲島大凱
法	中西結希乃
文	橋本充史
法	浜辺歩
医	張木すみれ
文	南出祐希
医	森田歩
工	山口尚樹
工	山下理子
総人	楊昭容
薬	由里本陽香
教育	吉田祥世
経済	米本舞桜
理	渡辺紗英

二回生

薬	荒川実来
法	石田あかり
理	遠藤智倫
京女	大西沙穂
兵医	岡雅博
工	笠島光司
理	倉橋あい
総人	酒井珠生
医	城尾みのり
文	高石京花
工	樽見勇我
農	戸髙海
経済	中村詩子
理	乗杉玲壽
工	堀田千有希
同志社	三浦いずみ
理	凌楡凱
文	渡邉一輝

三回生

医	石田七彩
農	乾未樹
文	大橋明日香
医	片岡美緒
医	釜田弘一朗
法	栗原瑞樹
医	近藤毅
京女	鈴木翔子
法	関美乃
文	豊留まり
経済	益満朋佳
農	松岡柚花
教育	藍予智

四回生

理	秋友祥香
農	穴田小恵
総人	伊藤迅亮
農	岩田恵理子
総人	内田鈴菜
農	小笠原萌葉
医	岸根葵葉
工	北田綾
工	坂崎亜実
農	柴田達哉
工	豊永嵩晴
法	中村紀保子
工	野口直哉
農	服部佳乃子
総人	宮本真之介
工	渡部裕貴

五回生

文	石本森羅
同志社	中岡大吉

修士一回生

エネ科	阿部聡太
工	市川拓真
工	鵜川大輝
文	牛田聡実
MBA	鍾涛
情報	中林亮
工	松尾有輝也
工	安田直記
理	吉田凌祐

修士二回生

工	覚道直治
工	金祺民
教育	邢書禹
経済	沙錦平
理	中村勇真
情報	一二暉生
神戸	森ちひろ

修士三回生

法	平野晶子

博士一回生

理	原誠人

博士課程修了

地環	藤井基弘



This book was
made by the LeME